「あんな馬に乗ると先方行つてから、馬の豆代とか酒手とかぐず〳〵云ひよる、モウ少し行くと百姓が莫銭を儲けに出よる、こういふ馬に乗ると安い」
と云ふてる處へ來ましたのが、馬の腹へてしま筵を巻いて櫓附きで、三寶荒神と云ふ在方から來るので馬とよう云ひまへん。おま〳〵と申します。
「オヽ客人、馬はどうぢやな」
「オイ馬に乗てやる、馬持つといで」
「そんな事云ひないな、オイ馬子、明星の宿まで何程で行く」
「お前方三人かな、三方荒神ぢやで合客の世話がいらん、どうぢや三人三百で行こうかな」
「馬子、其處を三人五百に負からんか」
「客人一人三百ぢやない、三人が三百ぢや」
「そうやから三人五百に負からんかと云ふね」
「客人私起きてるか」

「起きていゝでかいな、先方へ行つて馬の豆代や酒手ぐるみで五百に負からんかと云ふね」
「客人、仲々苦勞人ぢや乗つとくなはれ、誠に濟んが其方のノツペラボウ、お前中乗りしとおくれ」
「清やん、ノツペラボウて誰や」
「喜いやん、お前背が高いのでノツペラボウや」
「中乗りて何んや」
「馬のまん中へ乗るのや」
「よつしや乗つたる、馬持つといで……ヤツトセイ……ナア清やん、折角やが此の馬止めるは」
「何んでや」
「馬の首があれへんがな」
「阿呆やな、尻向きに乗つてるねがな」
「ほんに、なんや首筋から屁をこくと思ふてたんや」
「乗り替へ」
「モウ面倒臭い、尻を持上げてるで馬を廻して」
「同じ事や、乗替へ」
「よつしや、ドツコイショと首が出來た」
「以前からあるねン」
「二人の衆兩側へ乗つとくれ、成可櫓の外側へもたれぬ様に、お忘れ物は無いかな行きますぞへ……ドウ、此のどくさり馬が、客人を乗せるとビク〳〵仕やがつて、ドウハイ〳〵〳〵ドウハイ、ブウハイブウ、ドウブウドウ……お客人、勘忍しとくれ豆を喰ひさらすとブウ〳〵とど屁をたれて」
「馬子怒つてやりな、今こひたんは私や」
「客人か、手荒い屁をこく人ぢやなあ、おたのき申しますぜ、ドウハイ〳〵〳〵ドウハイブウドウブウハイブウ……客人、そうこいたら堪らんな」
「馬子、今の屁は馬や」
「馬と掛合ぢやがな」
「馬子そう怒るな、此の頃は道者が澤山來るのでお前等の錢儲けの秋ぢやがな」
「それが客人あかんのぢや、道者が來ると馬に乗る客までが道者に連れられて行て仕舞ふので、私は道者と聞くと腹が立つて堪らんのぢや」
「向方の松原に笠が澤山並んでるが、あれは何んや」
「ハイ、今關東道者が通りよりました」
「どうや馬子、彼の道者の中へ此の馬を暴れ込ましたら」
「客人そんな事を仕てもよいか」
「私は好きやが、馬子お前は」
「私も平常から業が起くでやりまへうか」
「オウやれ〳〵」
「落ぬ様にしつかりとつかまへていてくだされや、まん中の人、此處に竹があるで馬の尻を毆つとくなされ、行きますで」
「よつしや、ドウ〳〵〳〵〳〵」（鳴物入りはしり）